

令和4年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	豊中市市民ホール等指定管理者（代表企業株式会社 JTB コミュニケーションデザイン）	
施 設 名	豊中市立文化芸術センター	
助成対象活動名	人材養成事業	
内定額(総額)	3,650	(千円)
	公演事業	0 (千円)
	人材養成事業	3,650 (千円)
	普及啓発事業	0 (千円)

(2) 令和4年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	とよなか ARTS ワゴン 2022 シーズン	通年	演目: とよなか ARTS ワゴンフェスティバル他 出演: 中嶋奏音、東川内梨沙、廣瀬紀衣、別府みつき 他	目標値	616
		中ホール等		実績値	717

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>豊中市は、人口 40 万人の中核都市であり大阪市への利便性が非常に高い都市であり、北部、中部、南部にわけられる。地域の公立文化施設として 2017 年 1 月にオープンした当館は、アートを媒介とした積極的な地域社会へのアプローチを実践するため「地域で活躍する専門人材の育成と、ヒューマンリソースを活用した地域活性化への取り組み」「地域課題への取り組み／人と文化をはぐくむ創造性あふれる街の拠点」「豊中ならではの事業展開で独自性ある芸術ブランドの確立」の 3 ポイントをミッションとして本人材育成事業を開始した。「とよなか ARTS ワゴン 2022 シーズン」は、これらミッションに基づき「地域で活動するアーティスト人材の育成」「地域とアートとの関係を考え、自分がやるべき活動を自主的に考え行動できるアーティストとコーディネーターを輩出」「地域課題を当館とともにアプローチしていくコミュニティの創造」、そして育成した人材が活躍できる環境を創出し「アートとヒトと地域の循環」を根付かせる事を目的としている。本事業は、2本の柱によって実施している。一つ目は地域アーティスト育成である。オーディションによって選ばれたアーティストは、アートマネジメント講座やアウトリーチプログラム制作合宿などの講座や様々な実地プログラムを経て、地域アーティストの役割や目的、あり方を自身の中に作るプロセスを本事業の中で体験する。もう一つの柱である市民アートコーディネーター育成プログラムでは、アートマネジメント講座を受講し、地域でアートイベント実施する意義を考えだすプログラムを実施。座学や地域課題にアプローチするリサーチプログラム、ファンレイジングワークショップを経て、企画立案・実現に向けて動いている。育成事業に関わる人たちの中に生まれる相乗的なアートを媒介としたコミュニティの循環は、事業内で実施する様々なイベントでの地域の人々との良好な関わりを創出し、地域アーティストの意識向上、地域課題へ視点を持つなど、当初の予定以上に様々な波及効果を生みだしている。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>前述のとおり、当事業は地域に根ざしたアート人材育成事業である。地域にコミットし、育成プログラム参加者とともにスタッフも一緒になって考え、悩み、実行することで、一歩ずつではあるが、センターをハブとしたアートの循環が生み出されている。例えば、アーティストが小学校に行き、音楽を届ける「ふれアート」事業では、本事業開始した 2019 年の 3 校（総実施数 8 回）から、2022 シーズンでは 9 校（総実施数 87 回）と大幅に増加している。これは、アーティストが増えた事も起因しているが、何よりしっかりとアウトリーチプログラムをアーティストがそれぞれにしっかりと考え、子ども達と積極的にコミュニケーションを取りながら実施していることで、教育現場の中で大きな広がりを見せているからである。また、地域の福祉イベントへの参加など活躍の場が広がっている。地域アーティストとして活動することの意味を改めて考え、レジデントアーティスト期間が終わった後も引き続き活動できる場が生み出されていることは、まさにアーティストが生き、活かされる街が創り出されている。そして、その創り出されている場が多方面にわたり、且つ子どもをはじめとした劇場に来られない・来ない人々にも積極的にアプローチする場を整えていることは社会的にも非常に意義があるものである。アートコーディネーター育成プログラムは、企画制作事業が想定より遅れをとっているが、計画していた事業は実行しており、市のビジョンとも合致しながら推移している。経済的な視点から言えば、劇場が収入を得るという視点に課題が残ったが、様々な理由からアートに触れる機会がない環境にある人たちに積極的に届けることは、将来性のある経済的意義があると考えられる。また、アーティスト・コーディネーター共に活躍の場がある事は、すなわちアートによる経済の循環も生まれる。目先ではなく未来志向の強い事業である。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【アウトリーチ実施数】

指標：7校以上でのアウトリーチ実施

実績：小学校 9校（全86回実施）、その他 商店街（1回）、福祉イベント「いきてゆくフェス」（1回）

【市民アートコーディネーター育成プログラム受講生】

指標：アートマネジメント講座参加者 15名以上

実績：アートマネジメント講座受講者数 22名

【育成事業から派生した公演の実施】

指標：ロビーコンサートを含む8公演以上の実施。及び来場者の合計が定員の50%以上

実績：5事業 総来場者数 684名（定員数合計 800名）85%

【ワークショップ参加者数数】

指標：リサーチプログラム5か所以上の実施と子ども向けワークショップの10名以上の参加

実績：リサーチプログラムは計4日間実施し、地域課題にアプローチする施設を歩きながら複数箇所回った為、計測不可。子ども向けワークショップの参加者数 22名

【継続事業実施に向けたオーディション】

指標：オーディション参加者 10名以上

実績：参加者 25名うち一次審査通過者 14名。最終合格者 2名。

【動画視聴者数】

指標：合計視聴者数 4,000回を達成

実績：レジデントアーティスト4名の動画を計8本作成。但し、視聴者数は1,796回に留まる。

数値目標に関しては、上記のようにほぼ達成することができた。本事業を開始した2019年4月からコロナ禍中も地道に活動してきた結果がでてきている。特に、アウトリーチ事業「ふれアート」では、新規来校した小学校も含め87回実施することができ、2,752名の子ども達に音楽を届ける事が出来た。また、アートマネジメント講座への受講は回を重ねる毎に参加者数が増加している点から結果が表れている。

一方で、想定していたロビーコンサートが、新型コロナウイルス感染症拡大など様々な要因により実施できなかったことで公演実施数は目標値を達成することができなかったのは、次年度の課題としたい。

また、動画作成事業もスケジュールが大幅に遅れた事で、全プログラムが視聴可能となったのが2月大幅にずれこんだ事によって視聴者も2,000弱に留まってしまった。

この点に関しては、今後の事業全体のアウトプットの効率性を含め、スケジュールと目標を再設定することで持続可能な形で取り組んでいきたいと考えている。

一方で育成面では、質的目標を設けている。アーティストには「様々な要請に応え得るアウトリーチプログラムの制作と実演」。コーディネーター育成プログラムでは、「地域とアートとの関係性を考え自分がやるべき活動ができるようになる」である。そして、そのために、社会的な視点を養っていく事である。アートマネジメント講座や様々なプログラムやレポートで中長期的調査を行っている。

本業は今後も継続実施していく事で、それぞれの目標を達成することができ、より地域の中でアート事業を展開していく計画である。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

本事業は、通年実施している。4月にアーティストへのオリエンテーションを行い、6月からはアートマネジメント講座と市民アートコーディネーター育成プログラムのうちのリサーチプログラムを実施。また、合わせて、「とよなか ARTS ワゴンフェスティバル」も同時期に実施した。7月末からは「ごちゃまぜカーニバル」のワークショップを開始し、公演を8月中旬に実施。夏休みがあげるとアウトリーチ事業「ふれアート」がスタートし、毎月数十回の回数を行っている。併せて1年目のレジデントアーティストに向けたアウトリーチプログラム制作合宿を10月に実施。大阪音楽大学ミュージックコミュニケーション専攻生との協働企画事業は7月から制作が開始され12月に本番を迎える。市民アートコーディネーター育成プログラムでは、10月よりファンドレイジングワークショップや本年度1年目となる受講生向けの全4回の座学講座が実施した。そして、2月には本年度で終了となる2名のレジデントアーティストによるリサイタル公演。3月に4期生のオーディションと報告書の作成と非常にボリュームのある事業内容となっている。

内容が多岐にわたり、また多くのプログラムが同時進行しているために起きるコミュニケーションの循環によるクオリティの向上は大きな利点であった一方で、計画通り進まないプログラムもあったことは、育成自体を早急に捉えすぎたという反省点を生んだ。うまくいった点、うまくいかなかった点を今一度整理し、継続実施していくことでより精度の高い育成プログラムとしていく。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

人材育成事業として、適材適所に多くの専門人材を招聘し適切なプログラムを行う事が出来た。また、プログラムディレクターとして菱川浩二氏を招聘することで、アーティストとコーディネーターに対しても地域でアート活動をする視点への「きっかけ」を生む講座と実践につなげることができている。この点において、本事業では特に謝金や公演での出演料が全体の半分以上を占めているが、これからにつながっていくための事業展開と人材投入を行った結果であり適切だったと判断する。一方で、当初予算からは事業費を押さええているようにも見えるが、本事業が多岐にわたった為、達成することができずに終えたことが原因で執行できなかった予算もあるため、前項でも述べた点であるが今一度、全体の計画を見直し適切なアウトプット構築をすべきだという点は課題である。また、人材育成事業の目標として「アートとヒトと街をつなげる」を掲げており、本事業の鑑賞型事業においては、安価なチケット設定をしている点で助成金を除く収入が多く見込めない点は、今後の持続性を考えるうえでは検討する必要がある。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

本事業は、人材育成事業として実施しているが、その中身は非常に幅広いミッションを内包している。もっとも根幹にあるのは、地域のアート人材の積極的育成であるが、育成した人材が活動する場（または、そのきっかけとなる公演）を創出する事や、本事業の様々な事柄が総じて地域活性化につながっていくように設計している。この多岐にわたる事業を育成事業と地域へのアプローチの2つの視点から創造性について説明する。

【育成事業】

立ち上げ当初より「アーティスト」と「市民アートコーディネーター」の育成を同時並行で実施する点で、本事業のポイントとなっていた。つまり、どちらかだけの育成だけではミッションを達成することが困難であり、事業は停滞を迎えてしまうと考えたからである。オーディションによって選ばれたアーティストは、必ずアートマネジメント講座を受講する事になっている。本事業のアートマネジメント講座は、制作ノウハウや非営利芸術団体の運営を学ぶものではなく、アートと地域を地続きで考え、その意義性を改めて問う社会的な内容となっている。ここでアーティストは、新たな視点を自身の中に取り入れる事とあわせて、のちに市民アートコーディネーター育成プログラムを受講する市民との接点も創出する。アーティストが市民アートコーディネーターの存在を知り、その逆に市民アートコーディネーターもアーティストを知る事で、育成プログラム終了後多角的に展開される様々な事業に、より深く参加できることや、また劇場を飛び出し自走する形で活躍していく事も可能な状態を生み出している。また、もう一点特筆すべき点は、スタッフと育成プログラム参加者との積極的なコミュニケーションである。当館も開館当初より様々な育成プログラムを実施してきたが、どれも一過性のものであり、プログラム終了後何かが起きる事はなかった。しかし、本事業ではスタッフが積極的にコミュニケーションを取る。そのことで、アウトリーチプログラム、コーディネーターが企画するプログラムのブラッシュアップなど、様々な点において大きな効果を発揮している。

【地域へのアプローチ】

前述の通り、本事業は育成プログラムだけではなく、地域へのアプローチ事業を含む人材育成事業である。「おんがくあふれる街とよなか」を推進する中核都市の公立文化施設として、多彩な鑑賞事業を実施しているが、劇場と接点のない市民の中にも潜在的にアートに触れる機会を求めている。そこで、独自の人材育成事業プログラムと、アート人材の積極的な活動の場創出を継続しつつ持続して行なうなかで、地域へのアプローチ事業をしっかりと行う事で、この課題へのアプローチを試みている。

その一つが子ども達へ音楽を届けるアウトリーチ事業「ふれアート」である。令和4年度は87回実施しており、実に2,700人以上の子ども達と触れ合っている。しかし、豊中市全体の児童数22,297名から見ると12%でしかなく、さらに拡大していく必要がある。

また、劇場は豊中市の中部に位置するため、住む地域によっては行きづらい場所でもある。そこで、豊中市南部エリアをターゲットとした子ども向けワークショッププログラムも展開している。

このように、自身の環境に関わらず子どもが等しくアートに触れる機会を生み出す事で、彼ら彼女たちの文化資本の蓄積をし、将来につなげていく事で、地域の劇場が持続可能な形で存続する事願っている。

当館をハブと捉え、そこにアート人材と一緒に関わり地域に展開していく。その歩みのためにしっかりとした育成プログラムを経て、且つ関わる人がこのハブの中でまずはコミュニケーションを図ることで、地域に展開していくうえでのチームワークづくりに寄与する点は、他プログラムにはない大きなポイントである。

本事業は、小さいながらも文化的コモンズを形成しており、この点において非常に高い創造性を内包している。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

【人材育成事業】

アートマネジメント講座終了後のアンケートでは、参加者から10名の方から回答を得る事が出来た。

「講座全体の印象」では、期待通りが60%、普通が40%だったのに対し、今回の講座を受け、自身の心境に変化はあったか」という設問では、90%があったと解答している。また、「今後の活動に活かせる」の設問にも80%が活かせると回答している。

市民アートコーディネーター育成プログラムでは、地域課題にアプローチする人々や場所に出会う街歩き型リサーチプログラムとファンドレイジングワークショップを実施した。そのうちファンドレイジングワークショップでは下記のような回答を得た。

- 助成金制度をつくる側の願いや目的が多岐にあること、アートが社会の一部でありながら何故「社会をより良くできる存在」として見るのか、講座の趣旨とは違うかもしれませんがそんなことを考える時間にもなりました。」
- 文化政策が、物事をより良い状況に変化、移動させるためのものといった考え方が印象的でした。山下先生の講義はとても興味深く、また他の内容のものも受けてみたいと思いました。文化といっても大変幅広く、改めて文化とは何かを考える機会になりました。

本人材育成事業では、前項でも述べたようにアートと地域とのつながりを自身の中で考える事を目標としている。上記アンケート結果からも、小さいながらも地域の文化芸術の発展につながる礎を生み出す事ができた。

【鑑賞型事業】

育成人材の活躍の場を生み出すだけではなく、彼ら彼女たちが改めて自分自身とお客様との対話、またチケット代を安価に設定する事で、多くの市民が気軽に公演を楽しめる事を目的として実施した。アンケートでは下記のような意見をj得る事ができた。

- 私が拝聴させていただいた第一部は色がテーマのようでしたが本当に音がさまざまな色に見えてきて「音は耳から」と思っていたのが心の奥でしっかりと「音は心で」に変わりました。私は、指定難病もあり体中（目も耳も）問題があります。うまく言えませんが、その自分も含め「色」を感じられたと思います。この立派なホール、ぜひ今後もたくさんの方が「ちょっとってみよう！」と思える催しで、垣根を低くしていただきたいと思います。今日は心が動いた感じで「生きている」「生きていてよかった」と思いました。色はまさに七変化。心が動いたことで美しく儂く激しく変化しました。演奏して下さった皆様、セッティング等準備くださった方も含め、幸せな「色」を心に一杯ありがとうございました。（「とよなか ARTS ワゴンフェスティバル 2022」より）
- とよなか ARTS ワゴンの催しは素晴らしいと思います。若い人たちの発表の場になるので是非継続して欲しい！（「とよなか ARTS ワゴンフェスティバル 2022」より）
- 色々な人たちとコラボし3日間という短い間でありましたが、たくさんの刺激を受け、家でも話題にのぼることがよくありました。公演では出演のアーティストさん達も素晴らしく大変有意義な時間を親子共々過ごさせて頂きました。（「ごちゃまぜカーニバル」より）

以上の意見からも、目標は達成したと考えている。今後の展望として、よりこの目標を拡大していく、すなわち多くの市民にとって本事業が宝となり、アートを媒介としたコミュニティが本育成事業参加者から生み出されていく。そんなアート溢れる街実現のために今後も展開していき、地域の文化芸術の発展に寄与していきたい。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

(Plan)

本事業は、人材育成事業を軸とし、育成したアート人材とともに地域活性化に向けて活動する事業である。そのうえで「①地域で活動するアーティスト人材の育成」「②地域とアートの関係を考え、自分がやるべき活動を主体的に行うアートコーディネーターの育成」「③地域課題に協働してアプローチしていく」「④育成人材が活躍できる場をセンターが創出し、アートとヒトと地域の樹幹を作っていく」ことを目的とし、様々な研修プログラム、実地プログラムを、鑑賞型・普及啓発型で実施している。

【Do】

設定した計画を基として、座学形式で学ぶ研修から実戦形式の研修まで多くの研修プログラムを実施した。アートマネジメント講座では「アートってなんだろう？」のテーマを基に実施。公共と公共性から文化の生態系を考える講座や「子どもたちや地域へのアプローチ事業」「認知症の人たちとのアートプログラム」など社会の中でのアートの役割や展望を学んだ。また、アウトリーチについても基礎的な知識をアーティスト、コーディネーター育成プログラム受講生がともに学ぶことで、同じスタートラインに立ち今後の育成プログラムより理解の醸成が高まる工夫も行った。育成プログラムには、このほか、アウトリーチプログラム制作研修や、アウトリーチのランスルー、市民アートコーディネーター育成プログラムでは、街歩き型のリサーチプログラムやファンドレイジングワークショップなどを実施した。地域とのかかわり方、社会からアートをどう見るか。という視点を特に重視したプログラムとなっている。鑑賞型事業は、アーティストのセルフプロモーションの側面から、地域の子どものたちとのワークショップ。そして、これからを担う若いアートマネジメントを学ぶ学生との協働企画を実施した。

【Check】

アートマネジメント講座のアンケートでは、全体の60%が期待通りと回答し、また、心境の変化があったかの問いにも90%があったと全員が回答している。この点からも、本事業の趣旨に合致した結果となっている。また、アウトリーチ事業ふれアートの担当教諭向けアンケートの結果では、ふれアートを受けた子どもたちの音楽への関心が深まったかの質問に対しては「深まった」の回答を全員から獲得している。また、他小学校に勧めたいかという問いに対しても勧めたいと回答しており、本事業がより拡大していく可能性があることを示唆している。ワークショップに参加した子どもたちも、多くが来年も参加したいとアンケートやヒアリングで回答している点や、鑑賞型事業の来場者満足度も90%以上となっており、対外的には、非常により評価を獲得しているといえる。事業費から本事業を評価するうえで、その多くが未来志向のものが多く難しいところではあるものの、アーティストの育成、コーディネーターの育成、そして、アートを媒介としたコミュニティ形成が少しずつ進んでいる点から、今後の地域活性化の礎となっていると評価できる。

【Action】

アート人材育成に関しては、PDCに基づきこのスキームを継続実施することで人材を多く輩出することと合わせて、盤石の体制を整えていくことで、本事業が継続し且つ街の財産の一つとなっていく。課題としては、鑑賞型事業の来場者数の推移であり、おおむね目標値は達成しているが地域のアーティストとして活動する上で、この来場者数の50%増を今後の課題としていきたい。また、目標を達成しているアウトリーチ事業数などもより多くの子どもたちがアートに触れるきっかけを創出するために拡大していきたい。